

夜明け前に会いたい



唯川恵

YUUKAWA Kei

唯川 恵

YUKAWA Kei

夜明け前に

夜明け前に会いたい

一九九三年一月二二日 第一刷発行

唯川恵(ゆいかわ・けい)

一九五五年金沢市生れ。八四年「海色の午後」で小説家としてデビュー。最近は小説はもちろんエッセーの分野での活躍もめざましい。

●主な著書——

【小説】

『さよならをするために』『キスよりもせつなく』『シフォンの風』『彼の隣りの席』（集英社）

『ファイフティ・ファイフティ』（光文社）

【エッセー集】

『彼女は恋を我慢できない』『OL10年やりました』『シングル・ブルー』『ただそれだけの片想い』（大和書房）

著者——唯川 恵

発行者——安田富男

発行所——株式会社マガジンハウス

東京都中央区銀座3-13-10 千一〇四-〇三

電話 書籍販売部 〇三(三五四五)七一三〇

書籍編集部 〇三(三五四五)七〇三〇

印刷所——暁印刷

製本所——積信堂

装画——平野敬子

装丁——鳥井和昌

©1993 Kei Yūkawa Printed in Japan

ISBN4-8387-0415-1 C0093

乱丁本・落丁本は小社書籍販売部宛にお送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

定価はカバーと帯に表示してあります。

夜明け前に会いたい

夜明け前に会いたい○目次

1 冬雷を聞いた夜

5

2 二月に降る雪

54

3 迷い込んだ森の中

113

4 消えない爪あと

156

5 春霞の朝にゆく

204

あとがき

238

1 冬雷を聞いた夜

十二月の半ば、金沢では雷が激しく鳴り響く。

それは決まって真夜中だ。

『鰯おこし』とも呼ばれるその冬雷は、本格的な冬の到来を北国の里人たちに知らしめる。

じきに空を覆うだろう水分をたっぷり含んだ密雲は、自らの重みに耐えかねるように日本海側に雪を降らせ、それから乾いた風に変えて太平洋側に流れ込む。

舞い散る雪は確かに美しい。それは時には感動さえも呼び起こす。けれど日が過ぎるに従って、音もなく嵩を増し、街を埋めてゆく雪に棒を折るような気持ちになる。

希和子は布団の中で、息をひそめるように身体を丸めた。

また冬が来るのだ。それが当然の権利のように、あらゆる色彩を呑み込んで居座り続ける長い冬。稲妻が走ると、障子の向こうに風にたわんだ庭木が影絵のようにくっきりと浮かび上がった。

希和子はその心細げな曲線に目をこらしながら深く息を吐き出した。

夕食後、母の道江から「反物を見に行こう」と言われて、希和子は顔を向けた。

「どうして」

「新年会、着物着るんやろ」

「そのつもりだけど」

母は煙草をくゆらしている。煙草は母の少ない楽しみのひとつだ。人前ではほとんど吸わないが、食事の後は無意識のうちに指が伸びるようだ。蛍光灯の青白い光の中に、薄墨色の煙がまぎれてゆく。希和子はその煙の行方を目の端で追った。

「新しいの、母さんが買ってあげるわ」

「どうしたの、急に」

「成人式の振り袖も作ってあげんかったし」

「いいわよ、いつものように母さんのお古を貸してもらえば」

「去年もおととしもそうやったやないの。いつもそれじゃね」

「構わないわよ」

「他の人はみんな新しいのを着て来るんやないの」

「関係ないわ」

希和子が勤める信託銀行の新年会は、年を追うごとに華やかさを増していた。新入社員は必ずと言っていいほど振り袖を着、それ以後も訪問着や付け下げや小紋と、女子社員の殆どは着物で出席

する。

そのことで競い合うつもりはなかった。洋服で出掛けてもいっこうに構わない。ただ着物は好きだから、年に一度ぐらいいは着てみたいという気持ちがある。だから短大を卒業してから四年、ずっと母の若い頃の着物を借りていた。そしてそのことに不満を感じたことは一度もなかった。

「やっぱり母さんのは素人さんとか違うさかいね」

「私は気に入ってるわよ、粹でさ」

「たまにはちゃんとした娘らしいものも着て欲しいんや」

「娘らしいの着てても、ちゃんとしてない子いっぱい知ってるわ」

母の道江は、金沢の東の茶屋でかつて芸妓げいざをしていた。三十五歳、母に言わせると「ギリギリの時」に希和子を産み、それからしばらく仕事は続けたが、希和子の面倒を見てくれていた母、つまり希和子の祖母が亡くなったことをきっかけにやめている。今は小唄の師匠として、若い芸妓たちに稽古をつけている。

その頃持っていた土地が高騰ブームに乗って高く売れ、ここ東山に小さな家と、近所にアパートを一棟持つことができ、それが今の永江母娘の主な収入源だった。

アパートには芸妓も何人かいる。近くには料理屋も数軒あるので、そこに勤める中居なども住んでいる。母の古くからの知り合いの茶屋や料理屋の女将おかみなどが、このアパートを寮がわりに使ってくれていることもあり、空き室になることはほとんどなかった。

「もう『加賀屋』の蒔まきちゃんには行くなって言ったんやから」

「また勝手に」

「明日、何か予定でもあるのかい」

「別にないけど」

「だったらいいやないの。変な子やね、私を買ってあげるって言うてるがに」

加賀友禪を専門に扱っている『加賀屋』は、金沢の呉服屋の中でも指折りの老舗である。

母が蒔ちゃんと呼ぶ蒔子という女性は、かつて母と同じように東の茶屋から芸妓として出ていたが、『加賀屋』の若主人に見染められ、今は女将に納まっている。

母より二十近く離れているものの、今だに「姉さん」「蒔ちゃん」と呼び合い、親しく付き合う仲だった。

わずかに窓枠が軋み、希和子はふと顔を向けた。また風が出て来たようだ。昼過ぎから降り続いてきた雨は、夕方には曇に変わっている。それが雪に変わるのももうすぐだ。

「新しい支店長さんになってから初めての新年会なんやから、やっぱりきちんとしていかなと」
「関係ないわよ、そんなこと」

希和子は新しい支店長の顔を思い浮かべ、かすかに眉を寄せた。

今度の支店長は、前任の支店長とはかなり性格が違っていた。本社で何かしらまずいことがあつたらしく、金沢に来たことを左遷に近い人事と考えている節があり、それが傲慢さに形を変えて、地元採用の女性社員に対して横柄さが見られた。希和子も何度も不快な思いをさせられていた。

「けど、やっぱり金沢の女なんやから、加賀友禪の一枚ぐらい持っとらんとね。ちょうどいい機会

やないの」

母は煙草を消し、お茶をいれ始めた。茶碗の底が見えないほどの濃さ、それが母の好みだ。そして頑固に地元のお茶しか飲まない。

「だったら別に加賀友禅じゃなくてもいいわ。どうせ高いばかりなんだもの。最近じゃ合織でお洒落なのが出てるじゃない。残った予算を洋服に回してもらえる方がよっぽど有り難いんだけどな」すると母は憤慨したように睨みつけた。

「何言っとるの、着物は財産なんよ。洋服買うのとは訳が違うんや。どんなに見ばえがよくても、安物のぺらぺらを着てたら着てる本人までが安っぽく見えてしまう。私の娘にそんなものを着せられるはずがないがいね」

希和子は首をすくめた。芸妓だった母にとって、着物は自分を主張するプライドのひとつなのだ。母の着物に対するこだわりは、芸妓の頃から人一倍だったらしい。目利きは母の自慢でもあり、今でも、顔馴染みの茶屋の女将に着物を褒められると、母はいつも唇の端を少し持ち上げて、満足そうにほほ笑んだ。

そんな母に、着物の議論で勝てる自信はとうていなかった。

「分かったわ。じゃあ任せる」

あきらめたように希和子が頷くと、母は勝ち誇ったように頷き、それから眠れなくなったら困ると呟きながら、二杯目のお茶をいれ始めた。

日曜の朝、玄関の掃除するのは幼い頃から希和子の仕事だった。

ラフなジーンズとぶかりとしたベージュのセーター姿で、希和子は雑巾を絞り上げた。肩までのストレートの髪は無造作に束ねてある。

小さな玄関だからそれほど手間がかかるわけではないが、やはり冬の朝は億劫^{おちくう}だった。バケツにお湯を入れてもすぐに冷めてしまうのだ。

ほんの数年前までは、希和子の家にも井戸があった。井戸水は驚くほど暖かい。けれど地下水を利用する融雪装置が市内に普及するにつれ、水量は減り、今ではすっかり枯れ果ててしまった。それから母はお湯を使うことをしぶしぶ承諾した。

「希和子ちゃん、精がでるわね」

「あ、おはようございます」

希和子は振り向き頭を下げた。

路地の奥に住む近藤のおばさんは情報通で通っている。聞く分には面白いのだが、困るのは脚色が過ぎること。だから下手なことは言えない。希和子はいつも無難な挨拶で留めておくようにしている。

少し前に朝の散歩から帰って来た筋向かいの木島のおばあちゃんは、日頃は腰が痛い足が痛いと思痴ばかりこぼしているものの、町内の冠婚葬祭にはいつも先陣を切って登場する元気な七十八歳だ。

いつも通りの休みの朝の穏やかな風景だった。

希和子の住む金沢のここ東山界隈は、かつて東の廓くわくと呼ばれ、今も昔ながらのたたずまいを色濃く残している。観光コースとして、昼は若い人たちの姿が多く見られるが、夜は本来の大人の街に姿を変える。

希和子の家は、茶屋街から一本筋を入った所にあり、ここまで観光客たちが入って来ることはないが、団体を送り込んで来るバスのエンジン音が、時折、細い通りを流れるように伝わって来る。希和子はこの町で生まれ、この町で育った。

辺りに住む人の顔ぶれは幼い頃からほとんど変わらない。そして何らかの形で茶屋街にかかわっている。それがどこかで連帯意識のようなものを生み出している。

住み慣れた街。気心の知れ合った人々。確かに安堵感がある。けれど、それが沼の底で生きるような息苦しさを感じさせ、希和子を時々不安にさせることもある。

「おっす、親孝行してるじゃないか」

茶化す声に顔を向けると、紺野恒こんの じょうしが立っていた。

濃いグレーのコーデュロイパンツきに生なりのセーター、皮のブルゾンを羽織っている。

二十三歳。希和子よりひとつ下。額にかかった髪のせい、少年のまま背だけが伸びてしまったような感じがする。

「あら、もう店を開けるの、早いじゃない」

「日曜は稼ぎ時だからな」

恒は茶屋街の近くで『イースト』と言う観光客相手の喫茶店を営んでいるのだ。

近ごろこの辺りにはその手の店が増えていた。後発のイーストは少し乗り遅れているようだが、恒はいっこうに気にしてはいない。言葉では稼ぎ時などと言っているが、儲けようという商売根性がまるで見られない。若い恒のそれこそ趣味的要素が強い店だった。

「今の季節じゃお客さんも少ないんじゃないの」

「ところがそうでもないんだよ。最近の観光客は寒い時に寒い所に来たがるんだ。確かに金沢で美味いものが食いたかったら、やっぱり冬だもんな」

「なるほどね」

「たまには店に顔出せよ。抹茶入りのカフェオーレを作ってみただけど、試し飲みしてくれる奴がいなくてさ」

「私だってごめんだわ」

恒は時々突拍子もない食べものを発案する。この間は生麴なまふを使ったサンドイッチを産み出した。もちろん、試食の段階でメニューには登場しなかった。

「とにかく来いって。五時過ぎたら暇になるから」

「行けたらね」

「待ってる」

恒はちょっと空を見上げると、ブルゾンの襟をかき合わせた。昨夜の髪みぞれはやみ、どんよりとした雲にもいくらか透明感があつたが、寒さは相変わらずだ。日差しも地上にまで届かない。

「じゃな」

恒は足早に去って行った。

今年の春、東京の大学を卒業して帰って来た恒を見た時、希和子はひどく眩しく感じた。

恒には都会の匂いがした。彼が言葉の端に見せるイントネーションの違いが、四年の生活を物語っていた。希和子はまだ一度も金沢以外で暮らしたことはない。それがどこか気後れのようなものを感じさせるのだった。

午後になって少し陽が差して来た。雲の隙間から、細く何本もの光の柱が降りて来る。すぐに迫った卯辰山の、針葉樹の緑色が深く美しい。けれど多分、今日はこれ以上晴れることはないだろう。予定通り、希和子は母と一緒に家を出た。母は泥大島を着ている。半襟の刺繍は母が自分で施したものだ。呉服屋に出掛ける時、母はいつも装いに凝る。

ふたりで外出するのは久しぶりだった。浅野川にかかる浅野川大橋まで歩いてゆくと、途中、医王山が眺められた。頂きはもうすっかり雪に覆われていて、そこだけ光の照り返しが眩しく輝いている。川沿いに出て、希和子はふと足を止めた。

友禅流しだった。以前はよく見られたが、最近は川の汚れもあり、また友禅に使う染料そのものが汚染につながると言われ、観光用以外、あまり姿は見られなくなっていた。すべて郊外の染色団地と呼ばれるところで行われてしまうのだ。

「めずらしいわね」

希和子が言うと、母も目を細めた。

「そうやね。ここんとこずっと見てなかったわね」

冬の凍てつく流れの中に、華やかな模様が揺らめいている。

藍、黄土、臙脂、草、古代紫。

それが加賀友禅の五彩色だ。色彩のない季節だけに美しい。希和子と母はしばらく立ちつくし、その彩りに見入った。

バスに乗り、金沢では一番の繁華街となる香林坊に出た。そこに建つ大きなホテルの裏手に『加賀屋』はある。日曜の午後の街は人でごった返していて、ぼんやり歩いていると肩をぶつけてしまいそうだった。

店に入ると、店員がすぐに二階に案内した。

五年ほど前、目の前にこの大きなホテルが建った時、加賀屋も店を大々的に改装した。一階は観光客用に友禅などの小物を置き、二階が本来の商売の場所になっている。

「こちらでちょっとお待ち下さい。今、奥さんをお呼びして来ますさかい」

店員が奥に消え、すぐに蒔子が姿を現した。

「まあまあ、姉さん、お待ちしてました。希和子ちゃんも久し振り」

蒔子は臙脂の加賀小紋を着ている。帯は緩く、襟のかけ合わせも広い。けれど着崩れた感じがしないのは、着馴れているだけではなく、色白で優しい面差しのせいもあるだろう。久し振りで会った蒔子は、やはり、とても美しい。

「こんにちは」

「しばらく見ないうちにすっかり女らしくなっちゃって」